

三河 アララギ

2023年 令和5年2月 如月
きさらぎ

二 月 号

第七十卷 第二号

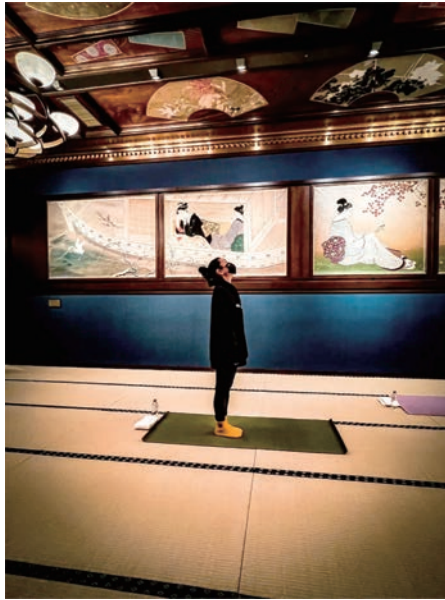


ニューヨーク日記(196) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

ART INFUSED YOGA

Blue Shoe Diaries



この素敵な場所で贅沢に日本のアートを眺めながら早朝に心身をヨガで優しく起こすの、悪く無い! 雅叙園の4階宴会場だけでなく庭園やギャラリー、館内を歩くだけでも美術館に来ているみたいでとってもおすすめスポット。館内のミニ目黒川にはかわいい鯉も泳いでます。ヨガクラスにはホテルの朝食も付いていてこれもまた素敵で美味しい朝のアクティビティー。クセになりそう。(アフタヌーンティーも興味深いのでそれにも来てみない!)

Gently waking up your body and mind through early morning yoga visually aided by a vast collection of Japanese art at one of the serene banquet halls at Gajoen. This hotel is well worth the visit, even just walking through its halls, gardens, and galleries rich in Japanese culture and art. An added perk for waking up for this yoga class is that it includes breakfast at the hotel restaurant in a beautiful setting. Don't forget to take a look at the bathrooms too.

目次

第七十卷第二号(通卷八三〇号)

表紙・ゆたかなる	御津 磯夫(1)	伊藤 晴江(29)	今泉 由利(35)
ニューヨーク日記(196)	Blue Shoe(2)	水野 絹子(29)	矢崎 直人(35)
歌集 わが冬葵	御津 磯夫(4)	牧原 規恵(29)	川口カルチャー受講者自作自詠俳句集(36)
歌集「草々後集」	今泉 米子(5)	稲吉 友江(30)	五感を澄ませば(8)
昭和60年十二月号作品	大須賀寿恵(6)	鈴木美耶子(30)	附録(八)
昭和60年十二月号作品	夏目 勝弘(7)	吉見 幸子(30)	『ライバル』
昭和60年三月・十二月号作品	岡本八千代(8)	牧原 正枝(31)	楽しい時間(123)
忘れぬ	弓谷 久子(10)	松田 有加(32)	『酔いの徒然』(130)
旅ゆく	今泉 由利(12)	亀岡 奈実(32)	『幕張賛歌』
木守柿ひとつ	安藤 和代(14)	白濱 和氣(32)	絹の話(147)
新しい手帳	清澤 範子(16)	池田 翔太(32)	「江上浩二の独り言」
今日より師走	山口千恵子(18)	木村 太一(33)	初狩便り15
厳島神社	杉浦恵美子(20)	大村 知慧(33)	本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬
日常を	伊藤 忠男(22)	中植あいら(33)	康鍼治療院
生垣の改修	白井 信昭(24)	弘下 雄也(33)	羽衣邪悉茗
急に始まる	矢崎 直人(26)	植村 公女(34)	編集室だより
『いこよせ』	いーはとぶ	木村 歩歩(34)	「三河アララギ」について
森 厚子(28)	山崎 俊子(28)	今泉 如雲(35)	(64)

歌集 わが冬葵

御 津 磯 夫

午睡よりめざめてすぐに書きとどむ明日は化して塵となるもの
あした

曾祖父の手澤の唐詩集注より積りし百年の埃まひたつ

壽延經の寫經三百字のわが文字の下に老い人を横たへて診る

庭のうちの呆けし土筆をつみ集む老病ながく臥す母のため

木々の間の一直線をすかし見て矢頃を數へたてよこに歩く

いのち終る日をかぞへねば一日のはやくすぎよと日に日におもふ

七十のよはひはすぎむ七十の繰り返すなきけふの一日も

山茶花は白く音なく咲きて散る木蔭の石の苔の上にも

光とどかずなりしところに南天のことしの朱き珠見えそむる

待つとしもなく待つあることを樂しみて老病もちつつ存ながらへゆかむ

歌集 「草々後集」

今 泉 米 子

黄に赤にハイビスカスの花ひらきわれは寝椅子にまた一日を
細き管より酸素吸ひつつ生きてをりシクラメン赤き花の縁側
もの思ひ忘れて縁の寝椅子にをり南天飴玉を口にふくみて

幾十年採りしことなくて楽しけれ屋敷境の高き柿の実

プランターへ蒔きし豌豆をわが屋敷の鴉が堀りしといふ声きこゆ
縁側の寝椅子にわれのゐる故にけれなゐかがやく秋のサルビア
もの悲しきわれの一夜の明けゆきてけふの光の満つる縁側

人音のなきひとときをゆらゆらとひかりかがやく風知草の穂は
庭の径歩みしは夜の夢にして朝よりわれは安楽椅子の上

くるしみのなくて満天星の紅葉まで歩みゆきしはあかときの夢

昭和60年12月号作品

大須賀寿恵

指に触るる脈膊今朝も整はず齡思ひて起ち上りたり

続くるのひとつ言葉に縋りつつ三河アラギのわが三十年

花終へしコスモス太く高けれど冬枯れゆくをたのみつつ待つ

鉄平石の径下りゆく生垣にヘクソカヅラの珠実金色

煮つつゐるカレーの匂ひ始めしとき雨の音好きと幼子はいひぬ

洗濯物濡らしてしまひぬ音もなく降り出だしたる秋の小雨に

診療室の窓には宮城野萩うねり肩の注射にわれ泪ぐむ

時おきて鳴く蟋蟀は一つならむ眼覚めゐることも悲しくはなし

雨は未だ降り止まざれど雲明るし鴉騒ぎつつ飛び立ちにけり

耕耘機の均らしし畑の土の上に群がりとべる狸々とんぼ

昭和60年12月号作品

夏目勝弘

祭り広場の出張所にて声はり上げ切手帳をわれは売りゐる

人多く出づる所は物売るる切手葉書も例外ではない

一人買へば我も我もと買ふ客にわが切手帳たちまちに終はる

切手展に並び立ちゐる列ならず記念の下敷が目当ての子供等

焼あとに握り飯食ふ沢庵は火燄ほのほ匂はぬ新漬けなり

消火せし水の滴る下にをり焼け残りたる鉄類は重し

雨降れば運動会の流るるを恋ひゐることを人には言はず

病などの理由はなしに一日をい寝て過ごしたき思ひ強まる

老人と若者の時代となりてをり我に名づくは中年貧乏

仕事の手順思ひ回らしいつしかに眠りてしまふが習はしとなる

昭和60年3月号作品

蒲郡 岡本八千代

夜回りの拍子木の音この夜半はわが家の背戸にて暫く止りぬ

角鉢には角に丸鉢には丸く注ぐべしとけふも盆栽に水を注ぎぬ

一杯づつの甘酒を熱く温めて二階の夫にも運びてゆかむ

魚を煮るアルミのうすき平鍋をかがやくまでに磨きあげたり

久しぶりの寒の夜の雨降る音を確かめに立つひとりの夜に

昭和60年12月号作品

父母の法要営まむと思ひをり青き実となりぬわが庭の萩

父と母と十七回忌十三回忌み骨はいまだ斂め奉らず

何処よりか淡き煙の流れきてわれの一日の始まり

台所のステンレスの流しをわが顔の映り輝くまで磨きあげたり

熨斗袋に折目なき紙幣数へ入れて今日はゆく石巻山の麓へ

秋暑き日の結婚式を二つ了へて初めて知れり陀毘囉の花の香

海桐花とはトベラの事とメモしおきてCDカードを持ちゆく

紅の百日紅の花高く活けて見合の二人をわれは待ちをり

天といふもめんの着物綿を入れしわが敷蒲団今日出来てきぬ

微かなる西日を背に感じつつ脚立の上にて門灯を拭く

忘れぬ

豊川 弓 谷 久 子

忘れぬ十二月八日よ戦争に明け暮れしてゐし我が十代よ

戦争の悲惨を知る身ぞ一日も早く平和の世に戻したし

柿と蜜柑りんごも今日は貰いたり心ぬくもる師走の風にも

きぬと言ふ名の姉なりき蚕飼ふ父と母とがつけし名前よ

絹の着物着る事無かりし百姓の母の一世を今日は憶ひぬ

ひつそりと白き山茶花咲き初めゐたり人も通らぬ藪陰の道

珍しく小雪がチラリと舞いて行くホワイトクリスマスと子は眩きぬ

大雪に長き停電北国の人等是如何に暮し給ふや

常と変らぬイブの夜となる記録的な大雪のニューステレビは流す

奥山の太公孫樹仰ぎて佇みぬ今が見頃のこの黄金色

貰いたる里芋大根さりげ無く混ぜてくれたり柚子幾つ

心まで暖まりをり冬至の夜柚子を浮かべし湯ぶねの中に

旅ゆく

東京 今泉 由利

旅ゆくといふ出立^{いでた}ちの整ひて地球を覆ふ大空を向く

祖父祖母の庭より見上げし天の川私の心の原点のまま

一万メートルに少し足らざる飛行中ほのかに丸く地球見下ろす

車輪梅の煮出し汁TEAM木のタンニン酸泥の鉄分赤褐色に染まりゆく

米粉に薩摩芋を擦り入れて発酵促す神酒となる

スケッチをしておられしことを田中一村私描かむ奄美の石を

黒潮の流れの中に奄美島ここに有り有る確かなことの

海の果て海の底辺楽土の話水平線の彼方より来し

二万五千年前旧石器時代の遺跡発見貝の装飾獅子の抽象

太平洋と東シナ海とに囲まれてアダン・ヒカゲヘゴ・クワズイモ

図鑑もて一本一本照らしゆくマングローブ林の構成樹種を

父母の庭にノボタンの花咲きをりき奄美島の紅紫の花に寄る

海風は強く強くハゼノキに果実は木蠟の原料になる

無患子^{むくろじ}のサポニンにて洗ふ大島紬洗ひ洗ひて出来上りゆく

玉串と神事に要するアマミヒサカキ奄美大島固有種にして

木守柿ひとつ

豊川 安藤 和代

暑さよけ寒きをよけて折鶴蘭緑も淡き小枝を伸す

鉄塔にひよ鳥のあまた集まりて反省会か夕陽は赤い

控めで物静かなる友に似て葉陰にそつと咲くやぶ椿

さつま芋の芽の出た先を水盤にいつしか緑が玄関飾る

はっちゃんもけん坊もいて楽しけれ幼馴染みはまだまだ元気

幼な子の様に口あけ歯みがきの指導受けおり歯科医のイスに

百均で三十枚の画仙紙に今日も描いたり冬バラの紅

寒きゆえ体いといと娘のくれし肌着ぬくぬく心ポカポカ

ひこばえにさ緑染まる冬の田ははぐれカラスか一羽の遊ぶ

十四年遺影の嫁は若くして師走の風は吾が身にしみる

冷ややかな雨の真昼間ひよ鳥は木守柿ひとつに大騒ぎして

目標は日に二百歩が寒きゆえ明日あしたで三日も過ぎぬ

「コロナゆえ入院の夫に会えぬ」と言う友にかけたき言葉をさがす

年賀状直筆ふで書きポリシーの吾は今年も二十枚書く

氏神に水神様に地の神と御供そろえて新年を待つ

新しい手帳

春日井 清澤 範子

思いがけないクリスマスの日
の贈り物に吾は心踊れり

サンタクロースからの贈り物
毛布は介護3のベットに掛けるも
ゆつたりと

吾が庭の貝塚伊吹きも苔生えて
裾に千両ゆらせてをりぬ

応接にストーブの火の赤くもえ上
のやかんの水が湯気を出しをり

吾は最善をつくして立ち上り娘啓子
の気持ちに添えるよう

娘と合ひ向いてスシローのうまい
寿司を吾はいただく

古里の香嵐溪を十一月四日
ライトアップ写真は報ず

父さんのいない家族は淋しいけれど娘と二人頑張って生きるよね

娘は由利先生とお話をして母さんの歌作りを励ましてくれる

令和五年の新しい手帳と家計簿を買ってきて早速予定は病院ばかり

亡き夫の買いくれし毛布にくるまり眠るは幸せ

一人身の娘は元気よくモップを掛けをりぬ廊下一杯の陽を浴びながら

小鳥は夜明けと同時に鳴きおれど何処へ行きしか又昼に鳴く

靴を買い娘の選びし靴を履き廊下を行ったり来たりして

今日より師走

豊川 山口千恵子

境内に落葉踏みつつ入りて行く寄道してゆく散歩の道は

人気なき境内素早く横切れるイタチを見たり朝の散歩道

カラカラと音して落葉吹かれゆき皆一所に止まり溜る

今日よりは師走となれり風寒し高々咲きゐる皇帝ダリア

ホトトギス花の了りぬ乱れる明日の仕事は花殻刈らむ

畑より採り来し大豆日に干しぬ莢のはじけるかすかな音す

ころころとところがりでくる丸き豆棒に叩きぬ大豆の莢を

広げ干すシートの大豆に冬の日たちはまち移ろひかげりゆくなり

日の温みかすかに残り手にやさし干したる大豆缶に収むる

芽生えくるかもしれぬと思ひつつ土に埋ぬるアボカドの種

にぎやかなもみぢのたよりうすれし頃わが家の楓紅葉しはじむ

貰ひたる高島曆かさねとぢ本棚に収む例年の如く

わが町より行方不明の老人を尋ねる有線今日は二人目

散り落ちし紅き花びら溜りゐる山茶花咲ける狭き路地ゆく

長き蕊残して花びら散り落ちぬダチュラは今年の花を終へたり

月曜日

蒲郡 杉浦恵美子

この度は叔母と訪ひたり晩秋の紅葉に間に合ふ秋の宮島

七百年幾度目鳥居の丹塗り終へ厳島神社は新たな百年

晩秋の日射し乏しき厳島塗り替へ鳥居も色和らいでゐる

宮島に宿泊すれば朝明けの鳥居の上に満月沈む

宮島の朝の鳥居の真上には五色の雲間に満月沈む

宮島に沈むを見たる満月が今しも上るひかり号の窓

半世紀隔てて三石降り立ちぬ我が祖母の里此処から見えぬが

三石は耐火煉瓦の街なりき駅より見ゆるは聳ゆる煙突

もう稼働してないのかと思ひきやコロナ禍ゆゑの煉瓦の需要

ガーデニングに煉瓦の需要コロナ禍の思はぬ余慶三石の街

落合川この源流は祖父の里今頃斜面は蜜柑の鈴生り

夭折の兄の名梅幸命名は一字採りしか祖父梅三郎

夭折の兄梅幸の命名は名優因むか祖父梅三郎

木枯らしが吹き荒れてゐる午前二時東京空襲小説佳境

オリオンの辺りに二つ流れ星数へて窓閉づ双子座流星群

日常を

大阪 伊藤 忠 男

日常を取り戻したか年はじめ娘や孫の笑う声する

元旦の朝は仏壇前にして娘息子と孫勢ぞろい

関東の味は濃きとか大阪の薄味馴染みなき味なりや

年代の違いなるかなメールにて年賀を済ます我が子供たち

除夜の鐘聞きて直ぐ行く初詣地元の神社一番乗りや

境内に小鳥鳴く声ホトトギス早くも春の息吹感じる

年賀状今年最後と添え書きに加える人の多きこの頃

元氣だと年に一度の便りなりこれはこれとて懐かしきもの

年末の寒波が去りて年あくる今年の予言ならば嬉しや

恒例の初競り声に活気づく豊洲に春の日差し差し込む

今年こそ今年こそはと歳重ねまたも今年に我が夢掛ける

夢叶い喜び溢れ飛び跳ねるそんな初夢また持ち越しに

老いてなほ息災と記す我が日誌今年もページ途切れさすまじ

年締めか外に出られぬ積雪に追い打ちかける寒風の町

我が今年漢字一字で「挑」むとす歳負けずして新たなものに

生垣の改修

豊川 白井 信昭

日も月も西の彼方に姿消しLEDの灯^ひに明るきわが家

秋よりは相つぐ故障洗濯機・掃除機・給湯器・腕時計

生垣の土留^{かこい}の囲吹き付けし単管パイプをクランプに固定

立上^{たちあげ}は 一列二並び角柱横積にして十段あまり

今頃はわが息子と孫と日帰りの四国へ渡る電車の中か

花壇の土留ひと処中国産柱状節理の石ひとつ交^かえり

生垣に石飛び散るを防^がむと板・ダンボール立て掛けておく

囲了え内側の穴底よりは大きい石すえ小石つめゆく

ストーマの装具腹圧気にしつつ大ハンマ持て打ち碎くなり

内外に車こみあい駐車場わが孫と妻につきつ離れつ

祝日の今日の人出にマスクかけ基本対策怠らぬこと

昼時の人込みのなか賑わしい長蛇の列に辟易したり

退院後コロナワクチンようやくに四回目接種霜月尽の日

生垣にハコマキの青戻りしか活力剤の「メネデル」失せて

住きことの兆しにせむと穴場にて石潰しつつ平たく均す

急に始まる

埼玉 矢崎 直人

職安の雇用保険の給付期限過ぎて就職未だ決まらず

職安の担当の人心配の電話をくれて恐縮致す

少しずつ働く条件見直して採用一步一步と近づく

失わず一步一步を目標を見詰めて道を歩んでゆかむ

気をたしかに確としつかり保ちいて気持ち入りたる一步一步を踏める

採用の電話を受けて明日から明日が急に始まるこれから

パートにて働きながら学べるの職を求めて職に就きたる

福祉職未経験の支援員一から始まる始まる一步

電車乗りバスに乗り換え行く職場通勤の道決まるる経路

久し振り定期を買える明日決まる簡単なことそれでもうれし

無理をせず出来るところからやってみるまずは周りを周りよくみる

バス通り歩けば道が変わりゆく見えるのひとつ見え方ひとつ

三日月や惑星パレード水金火土木天王海王並ぶ

霧の中日輪白く浮き上がる丸き姿を空に浮かべる

駆け足の年の瀬迎ふ来年はいい年なれとそれのみ願い

『いっしょよせ』

西浦公民館 いーはとぶ

壁づたひにカニさん歩きの夫と孫見るも愉しき往つたり来たり

森 厚子

空澄みて黄葉^{もみぢ}輝き初めての銀杏拾ひよ童のごとく

鰯雲のけふのみ空よばかりばかり白雲のゆうるり流れてゆけり

時移り海上の森にジブリできあの陽だまりは今もあるかしら

山崎 俊子

海沿ひの道をぶらり行く庭の松古き家並みに古偲び

窓からは小さく見ゆる夕陽ヶ丘夫のゐない日娘らと遊びし

年賀状今年の家族の写真スポットここかあそこかと捜しをり夫は

伊藤晴江

案内したる息子に続きレストランへ石窯ビザの香ばしさ満ちて

国分寺の息子の下宿のほど近きお鷹の道にて湧水見入る

秋の庭視線受けて見上ぐればトンビと目の合ふここは西浦

水野絹子

不安がる年寄り相手にうら若き女医は気さくに喋りつつ診る

裏庭の葉蘭に潜む黒き猫君とは前に飯田で会ったね

暗き朝目覚まし鳴りてもわれはまだおぼろおぼろの夢かうつつか

牧原規恵

苗育ち娘の畑に植ゑに行く終はりし頃に絶好の雨

誕生日に「長生きしてね」のメールあり必ず付くは「元気で」の文字

幾万の人通ひしか西浦駅跡形も無く風通るだけ

稲吉友江

柿好きの父偲びつつ仏前に供ふ今日の日二十三回忌

少しづつ御握り食す老母よ頬も仄かに赤みさしをり

テーブルに団栗一枝挿してあり散歩のみやげと夫は言ふがな

鈴木美耶子

円ら実のなほなほ白きナンキンハゼ春日浦の路通るたび嬉し

忘れ物に気づき今来た道行けば友が手を振る両の手を振る

夏過ぎて声変はりせし少年よ話の端々気づかひありて

吉見幸子

少年よ声変はりせしも話弾む週に一度の声の定期便

市役所のロビーを飾る秋の花古き友よりの「見たよ」とLINE

同じ組は何年の時か思ひ出せぬいつのまにか逢ひいつのまにか友

牧 原 正 枝

お別れの友は中学のかの頃の乙女のやうな清らかなまに

このバッグ君の思い出いつぱいよ西浦の町ひとまはりする

現代学生百人一首

東洋大学

「もう十分」余命半年微笑む祖母あなたが良くても私は嫌だ

大阪府立港南造形高等学校一年（大阪府）

松田 まつだ

有加 ゆうか

16歳

質問をクラスラインになげかける既読はつくが返信0件

近畿大学附属高等学校二年（大阪府）

亀岡 かめおか

奈実 なみ

17歳

入学式すぐに実習キュウリ植えいきなり今日から農高生だ

兵庫県立農業高等学校三年

白濱 しらはま

和気 かずき

18歳

目を凝らし細かくハンドル回してくミリより低い俺たちの世界

広島県立広島工業高等学校二年

池田 いけだ

翔太 しょうた

17歳

無観客いつもは聞こえぬ打球音プロの凄さを改めて知る

広島県立広島工業高等学校三年

木村 きむら

太一 たいち

17歳

細腕に震える三指みつゆびそつと当て伝わる拍動感じるいのち

広島市医師会看護専門学校医療高等課程二年（広島県）

大村 おおむら

知慧 ともえ

30歳

あの頃にもとに戻れるなら一言座学だけでも起きとけ私

広島市医師会看護専門学校医療高等課程二年（広島県）

中植 なかうえ

あいら

19歳

大豪雨部活がなくて喜んだそんな自分をどこか恥じてる

岩国市立玖珂中学校二年（山口県）

弘下 ひろした

雄也 ゆうや

13歳

『俳句』

小春日や老婆三人立話

植村公女

一生の一日を生き日向ぼこ

大鳥居くぐりて仰ぐ初御空

冠雪の富士に轟音オスプレイ

木村歩歩

友逝きて名残の空に明の星

小春日に墓に映りし吾の影

銀の穂も金の穂と化す枯れすすき

急坂の家路の先の冬星座

元伊達家学問所なり萩の塵

今泉如雲

山澄むやイザベラバード来しといふ

戊辰戦落城の図や芋嵐

思ひ出の父よ母よ年の暮

うれしさも心がまえも来たる年

思ひ出のお正月に戻りゆく

羽子板のこわれしままを飾り継ぐ

降るでなし積るでもなし雪模様

冬の星闇の中ほど瞬けり

時雨るるや降られるもよし面接日

冬青空今日から踏めるまず一步

冬青空雲一つなき窓を拭く

冬茜映ゆるは富士のシルエット

今泉由利

矢崎直人

川口カルチャー受講者自作自詠俳句集

花^{はな}びらは紙^{かみ}のコップの盃^{はい}に受^うけ

雨^{あめ}あがる川^{かわ}面^もを彩^{いろど}るさくら花^{はな}

春^{はる}の宵^{よい}友^{とも}と語^{かた}らう旅^{たび}の宿^{やど}

泥^{どろ}んこにはしやぐ子^こ供^{ども}ら梅^つ雨^ゆの空^{そら}

紫^{あじ}陽^{さい}花^いや孫^{まご}の笑^え顔^{がお}も七^{しち}変^{へん}化^げ

御^お巢^{すた}鷹^かに御^み霊^{たま}は眠^{ねむ}る夏^{なつ}の月^{つき}

炎^{えん}天^{てん}下^か釣^つり人^{ひと}背^せ中^{なか}何^{なに}思^{おも}う

虹^{にじ}立^たちて忽^{たち}ち君^{きみ}の在^ある如^{ごと}し

水^{みず}やりのた^ひびに向^{まわ}日^り葵^{あひ}背^せくらべ

天^{てん}窓^{まど}に二^ふ日^つ月^{つき}あり自^じ肅^{ゆう}中^{ちゆう}

由^ゆ利^り

雅^が山^{ざん}

末^{まつ}美^み

秋^{しゅう}山^{ざん}

山^{やま}根^ね

雄^{ゆう}山^{ざん}

秋^{しゅう}山^{ざん}

虚^{きょ}子^し

龍^{りゅう}康^{こう}

由^ゆ利^り

新芽木は森をつくりし山となる

花びらの舞い散る舞台我吟ず

いつの間に尻尾なくせり蛙の子

草茂り武士とむろう戦塚

鮒ずしや彦根の城に雲かかる

夏の海ローソク島に手を合わせ

鈴虫やコロナ忘れし散歩道

我れ老いてまたまた伸びる夏の草

雄山

秋山

由利

精真

蕪村

紀山

秋山

雄山

五感を澄ませば(8) 杉浦恵美子

序詞

もう何十年も昔、三河アララギに入会したての頃、ある日、月例歌会の末席に小さくなつておりました。

御津邸の二間ぶち抜き座敷に会員が身動きもならぬほどひしめいていました。

やがて磯夫先生がお出ましになり歌会開始。

会員の詠歌を先生がひとつひとつ講評なさいます。

先生の厳めしいご様子、またお医者様特有のくぐもつた声を聞き漏らすまいと皆さんが緊張しきつていて、その場の雰囲気はピーンと張りつめていました。

ある歌に来た時

「平凡、つまらん」と情け容赦なく一刀両断。

自分の歌でないのに妙に居心地悪かったことを今でも憶えています。

すると、私の隣にいた上品な女の方が

「平凡がいちばんなのよねえ」

と、こつそり耳打ちされました。

確かにそうです。平凡であることは日常において、人生においては何よりです。

しかし詠歌では、平凡なのは、自己満足でよければ別ですが、他人に感動を伝えられません。

文章でどんなに「よかった」或いは「悲しかった」と書いても具体的にないと読者に伝わらないのと同じです。

つまり「独創性」が求められているのだと思います。

唐突ですが、独創性と云うと和歌の修辭技巧の一つ「序詞」を思い出します。

序詞とは、手元の説明書きによると

「枕詞の古い形といつてよく、比喩や掛詞・同音語などの関係で下に係る。枕詞よりも内容的に複雑な表現効果あり。枕詞と異なる点は、(1)音数が自由で、長いものもある。(2)受ける語も固定されず自由なので、創作性に富む。」とあります。

例を挙げてみましょう。小倉百人一首の

46 由良の門を渡る舟人かぢを絶え行方も知らぬ恋の道かな

何と上三句が「行方も知らぬ」を導く序詞。

この歌の主題は下の句「行方も知らぬ恋の道かな」で、上の句（序詞）の「（潮流の激しい）由良海峡を渡って行く舟人が櫓櫓をなくして波に漂うように」の独創性が、ただでさえ潮流の激しい海峡で大事な櫓を失くしたらそりゃ困るわね。よってどんなに途方に暮れた恋をしているのかを鮮やかにイメージさせてくれます。

もう一例、『伊勢物語』東下りの段より

駿河なる宇津の山べのうつつにも夢にも人に逢はぬなりけり

第一、二句「駿河なる宇津の山べの」が、「宇津」と「うつつ」を導く序詞。この歌は主人公が東国への旅の道中、駿河の宇津ノ谷峠で出会った顔見知りの人に、都に残してきた恋人に届けてほしいと託したものの。

具体的な地名「駿河」「宇津の山べ」によって主人公が都から随分遠くまで来てしまったという感慨。「宇津」が「うつつ（現実）」という音を導き出し、主題は「現実にも夢の中でもあなたに逢わないことですよ」で、当時は夢に恋しい人が現れないのはその人が自分のことを

思ってくれていないからだと考えられており、「あなたはもう私のことを思ってくれていないのですね」というメッセージを詠み込み、更に序詞の効果によってここまで複雑な歌に仕上がっています。

序詞は枕詞とは違って一回性のものです。だからこそ面白く、歌の可能性を広げているとも言えると思います。残念ながら現代ではこのような修辞技巧を使うことはないようですが、序詞の独創性には学ぶべきものがあると感じています。

我が入門見届け母は入院す母も憧る三河アララギ

附 録（八）

矢 崎 直 人

【就職】

時雨るるや降られるもよし面接日

職安に通い紹介状を出してもらい面接に行くのを半年程続けて就職することが出来ました。未経験の福祉分野で探していたので職安の担当の方と話し合いアドバイスを頂きながら履歴書を見直し、志望動機を整理しました。四月から資格取得のため専門学校に入学が決まりましたが、面接に行けども採用には至らず雇用保険の給付期限が切れて年内は難しいかと思いい始めていましたが、タイミング良く福祉施設で募集があつて雨の中面接に行ったらその日のうちに採用になり次の日から出勤することになりました。

福祉職未経験の支援員一から始まる始まる一步 冬茜映ゆるは富士のシルエツト

電車とバスを乗り継ぐ定期を買うと働きに行くことが出来るのが嬉しかったです。夕方に職場からバス停まで歩いて帰る時に、夕焼け空を背負う富士山が黒く浮かび上がって綺麗です。バス停に着いてもバスが来るまで時間が

ある時は、一つか二つ先のバス停まで歩きます。行きのバスに乗っている時はあつという間に過ぎてしまふ風景の中に、郵便局や商店などがあるのが分かるとそこで生活する人々の営みが見えてきます。

久し振り定期を買える明日決まる簡単なことそれでもうれし
バス通り歩けば道が変わりゆく見えるのひとつ見え方ひとつ

【惑星行列】

冬の星闇の中ほど瞬けり

関東平野は年末穏やかな快晴の日が続きました。夕方の四時半頃、惑星パレードと呼ばれる天体ショーが観測されました。地平線の近くに宵の明星の金星と水星が、三日月を挟んで、火星、木星、土星が肉眼でも観測出来ました。双眼鏡を使えば、天王星と海王星も観測が出来たそうです。太陽を中心に公転する惑星が一度に観測出来るのは珍しく、次回は二〇六一年だそうです。日没後の夜空が暗くなってから、星を探しながら観ていた眼にはいつもより星の輝きが増してみえました。

三日月や惑星パレード
水星 火星 木星 天王星 海王星 並ぶ

『ライバル』

中屋保之

今年受け取った年賀状に何通かの「賀状取り止め」があった。些か寂しい気もしないではないが、わが身を振り返っても致し方なし、といったところである。実は私も、後期高齢者に到達するにあたって、昨年の年賀状には「ご無礼ご容赦」を添えて送らせていただいた。それでも、幾人かの友人知人恩人との賀状のやり取りは正月の楽しみの一つであることに違いはない。

その中の一通に、小学校からの幼馴染のものがあつた。彼は確か、三年生か四年生で転入してきて以来の付き合いであるが、当初は母親同士の方が懇意にしていたような気がする。中学に進むにあたり、彼の主導のもとに同級生の男女数人がグループとして集まるようになった。私の中では、比較のおとなしめの級友たちだったような記憶がある。そんな中に、なぜか私のような決しておとなしくない者を受け入れてくれたのか、未だに「謎」なのである。もしかしたら、お目当ての女の子がいたのかも・・・定かではない。

思い返せば、この時あたりから私が彼を「ライバル」として意識を持ち始めたのかもしれない。断っておくが、世間的な「同等もしくはそれ以上の実力を持つ競争相手」といった意味では決してない。勿論、彼は私を「ライバル」として意識したことはないであろう。このグループで、彼が音頭を取って同人誌の真似事をした折、私が書いた拙い読書感想文をとりあげてくれたことがあつた。今にしてみれば、ほかに提出したメンバーがいなかったのかもしれないが、このことが私の自信に繋がりが幾ばくかのコンプレックスを解消してくれた。つまりは、競争しなくても同等になれた瞬間だったのであろう。私が持ちえない多くの気質を持つ彼が、それをひけらかすことなく私に感じさせてくれ、彼とは違う私の気質を見出してくれる心地の良い「ライバル」である。かつて「ライバル」として約束したことがある。それは、お互いの結婚式の司会を務めること、残った方が葬儀委員長を司ることの二つである。

幸いなことに、前者は約束通り役目を果たせたが、後者の方はどうなることやら。

私の持ちえない、彼の気質のひとつに「継続性」がある。幼いころからギターを習い始め、今もってそれを続けている、ということを今年の年賀状にも記してくれた。私はと言えば、熱しやすく冷めやすい性格で何事も長続きしない。が、数年前から始めた「詩吟」は続けている。彼のギター歴には及びもつかないが、いつか、何らかの形でコラボできたら、なんて勝手に夢を抱いている。

詩吟と言えば、私より半年ほど入会の早い同年配の「ライバル」がいる。彼は、^ゝ鞭声肅々を剣舞で踊りたいがために入会したそうである。その機会を伺いながら吟力の向上に勤しんでいる。音響関連のプロで、聴力にかけては私なぞ及びもつかない達者である。それに、舞台度胸が良い。本番に強いという私にとっては誠に羨ましい限りの気質の持ち主である。教場での稽古では、むしろ私の方が評価が高い（自分で思っているだけだが・・・）はずなのに、いざ、大会本番の舞台上での評価では常になの方が上なのである。悔しいったらありやしない！とは冗談で、いつも一緒に教場運営に携わって助けてもらっている貴重な「同志兼ライバル」なのである。教場の厳しい？稽古に耐えられるのも近くに良き「ライバル」がいてくれるに他ならない。

ほかにも、私の人生に欠くことの出来ない「ライバル」が数^{あまた}多い。程よい緊張感と距離感を保ちながら、いざという時にかけてくれる温かい言葉や心遣いに感謝しつつ、ライバルたちとの繋がりを大切に生きてゆきたいものである。また、私自身がそうだった私の「ライバル」たちのように何かしら役に立つ振舞ができるよう心掛けたいと思う。

楽しい時間 123

山本紀久雄

2022年12月29日

「明治天皇が鉄舟から得た判断基準」その八

天皇に仕える侍従とは、常に天皇と親しく接し、遠慮なく天皇に物事を発言できる側近であつて、御意見番であり相談相手であるということとは前号で述べた。

そのような職務である侍従として鉄舟が、当時二十歳代であつた明治天皇の身近に仕えたということは、必然的に明治天皇は、鉄舟が必死に禪修行していた大悟前の状態と、大悟後の完成された姿、その比較を詳しく見つめていたと思われる。

人間が大悟するということは、普通人ではなりえない境地であり、筆者には解説と分析は出来得ない。したがつて、ここは鉄舟の身辺近く内弟子として過ごした小倉鉄樹の言葉を借りたい。

《完成せられた後の師匠（鉄舟）は、一段と立派なものになつて、實に言語に絶した妙趣が備つたものだ。性来のたいぶつが、磨いて磨き抜かれたのだから、ほかの人の、形式的の印可とはまるでものが違ふ。師匠が稽古場に出て来ると、口を利かずになぐ座つてゐるだけだが、それでもみんながすばらしく元氣になつてしまつて、宮本武蔵でも荒木又右衛門でも糞喰へといふ勢ひだ。給仕でおれなぞが師匠の傍に居ても、ぼつと頭が空虚になつてしまつたゝ颯爽たる英氣に溢れるばかりであつた。客が来て師匠と話をしていると、何時まで経つても帰らない者が多い。甚だしいものになると夜中の二時三時頃までゐた。帰らないのは師匠と話をしていると

苦も何もすっかり忘れてしまつて、いい氣持になつてしまふものだから、いつか帰るのを忘れてしまふのである》（『おれの師匠』島津書房 2001刊）

この小倉鉄樹の語りは、大悟後の鉄舟という人物の豊かさ、素晴らしさを示していて、大悟するということは、具体的にこういう状態になれるものだと思断できるし、鉄舟が本来持っている能力が最大限に發揮されている様子が、正直に素直に伝わってくる。であるから、明治天皇も鉄舟から「何か」を、それは「精神的なもの」であろが、多くの影響を受けたはずである。

また、実践されてか

ら15年にかけての明治天皇の状況を振り返つてみれば、「心の修行」という精神的な分野に高い関心を持たざるを得ない環境下にあつた。

では、明治天皇が「心の修行」を必要とした背景とはどのようなものであつたか。それらについていくつかに分けて検討してみたい。

1. 「王政復古」の実現

我々は、明治天皇が歴代天皇と大きく異なる特異性についてしっかり理解しないといけない。それは歴代天皇が考えても見なかつた「王政復古」を実現させたことである。この「王政復古」、もし仮に孝明天皇がご存命であつたならば、倒幕と王政復古を目指す人々の前に立ちかはだかり、なおも妨害し続けていたなら、維新の実現は極めて難しいことになつたに違いない。あるいは、その実現は



明治天皇

不可能でさえあったかもしれないであらう。

2. 孝明天皇の思想を受け継いでいない

孝明天皇は感情が激しく、その気持ちがあるのままだに頭れている書簡が多く残っている。したがって、孝明天皇の分析はそれほど難しくないと言われている。



孝明天皇

その書簡から明確なことは、既によく知られているように「けがれた夷狄（外国人）を一步でも神国日本に入らせない」という本心からの攘夷思想家であったことである。

この孝明天皇の皇子である明治天皇は、当然のことながら父孝明天皇から教育を受けている。具体的には和歌で、孝明天皇に拝謁するたびに歌題をもらうのを常とし、和歌が出来ると、祐宮（明治天皇）は優れた歌人でもある父孝明天皇に添削を仰いだ。したがって、和歌の指導を通じて人間形成と天皇学を授かったはずと推測できる。このように大和民族伝統の詩形であり、神話の昔から人間形成の必須条件として伝承されている和歌を通じ、明治天皇は父である孝明天皇から指導を受けていたのであるから、当然のごとく「孝明天皇の強い意志である攘夷思想」を受け継いでいると思われるだろう。しかし、これを全く受け継いでいないのである。

慶応2年末に孝明天皇が崩御されたが、翌慶応3年には未だ慶喜は将軍として大坂城にいた。この当時の外交最大課題は孝明天

皇が拒否していた兵庫開港であった。

慶喜は「四海同胞（視同仁）（天下の人は兄弟のごときもの、親疎の別なく平等に仁慈を施すべし）」の古訓に倣い、新しい治世の始まりにあたつて国を一新しなければならぬ、という上書をもつて兵庫開港問題について朝廷説得を何度も試みた。

この結果、さしもの朝廷も、列強の脅威を無視できず、5月24日、摂政二条斉敬は慶喜に書を送り、将軍及び諸侯の意見に鑑み、兵庫開港は勅許せざるを得ず、と応えた。

この間の慶喜と朝廷との交渉事に「恐らく年少の明治天皇は、これら朝廷の決断にほとんど、或いは全然関わっていなかった」（『明治天皇・上』ドナルド・キーン著 新潮社 2001年刊）とあるように、年齢を要因として裁断を下すことが出来なかったという指摘は、裁可をするための「心の修行」が今後必要だということを示唆している。

いずれにしても、兵庫開港勅許は「攘夷ではなく開国」であるから、明治天皇は孝明天皇の思想を受け継いでいないことになる。このように天皇は、万世一系という重い歴史を背負っている立場であり、孝明天皇までは国民に「見えない」存在であったものが、明治天皇は新時代となつて「見える天皇」となられた。

したがって、明治天皇の心中は、誕生してくる皇子・皇女の死亡という相次ぐ子を失う親としての悲しみと、唯一の継承者である明宮（大正天皇）の虚弱性に悩みつ、国民には「強い国家元首」としての姿を見せ続けなければならないという乖離・相克に耐え忍ばねばならなかったわけで、その克服のために「心の修行」の必要性を痛感していた。

そこに明治天皇のおそば近くに、大悟を目指して命がけで禅修行中の鉄舟が存在している意義があった。

『酔いの徒然』（二三〇）

丸山 酔宵子

『103歳の大往生』

令和4年11月4日早朝、母は小春日和の海を臨む部屋で静かに息を引き取った。享年103歳であった。

小春日に花に包まれ母が逝く

酔宵子

大正8年（2019年）鎌倉光明寺のある材木座で生まれた。実家は材木座海岸から山道をかなり歩き、登り切った高台にあった。大正12年（1923年）関東大震災、当時4歳の母はその記憶を後年語っていたが、大津波が実家の高台のすぐそばまで押し寄せてきたそう
だ。

小さいころ遊びに行くと畑とともに大きな鶏舎があつて、早朝からの鶏の鳴き声が記憶の中に蘇ってくる。材木座は古くから避暑地として有名で、実家も貸家としてひと夏提供するようなこともしていたようだ。近くには

上皇后美智子さまの実家である正田家やロスアンゼルスオリンピック馬術金メダリストの西大佐（バロン西）の別荘があった。

昭和17年（1942年）、母は23歳で、大正6年新潟生まれの海軍職業軍人の父と見合い結婚し、海軍横須賀基地に近い逗子に住んだのである。将に、真珠湾攻撃の翌年で、日本は戦勝の高揚感が残り、未だ海軍が肩を切って幅を利かせていたころである。

開戦忌ミサイル狙ふウクライナ

酔宵子

しかし、戦況は日増しに悪化、長女出産後は横浜に引越し、長女を抱きかかえながら焼夷弾を浴びた経験もあったそう
だ。

昭和20年9月終戦の混乱とドサクサの中で長男（筆者）を生み、3年後には次女を生み子供3人を立派に育て上げてきたのである。

父は、昭和59年（1984年）7月大腸がんで亡く

なった。享年65歳。現役の葉山町町会議員であったため、葬儀にはいろいろ苦労したことが思い出される。先ず宗派が浄土真宗であり、鎌倉幕府から疎外されたため、鎌倉や逗子には浄土真宗の寺は皆無で、やっと三浦半島の外れ、諸磯^{もろいそ}近くの長井にある「勧明寺」を見つけ、住職に葬儀一式をお願いしたのである。

【閑話休題】因みに、勧明寺のある長井は、「最後の海軍大将 井上成美^{しげよし}」（阿川弘之著）が、戦後、静かに暮らし「英語塾」を開いて近所の子供たちに英語と英国式マナーを教えていたところで、「勧明寺」住職もその生徒の一人であったのだそうだ。

父が亡くなってから38年、母は葉山で一人の生活を続けてきた。元々手先が器用な母は洋和裁が得意で、戦後のもののない時代にも子供たちの服を作るのは勿論内職として家計を助けてもきた。また、鎌倉彫も長く師範の資格も持ち、丁寧^{ていねい}に巧みに作られたお盆、手鏡、筆入れ、筆立て、時計などの遺品が残されている。

ずっと一人で住み、要介護2程度であったが、97歳

で油壺に母にふさわしい有料老人ホームを見つけ入寮したのである。目の前が有名な油壺のヨットハーバー、真正面には富士山が見える絶景な部屋で、コロナ禍でも元気に過ごしてきた。100寿のお祝いもホーム全体でお祝いいただき、葉山町長も出席し、記念品と安倍内閣総理大臣からのお言葉もいただいた。

10月までは元気に食欲もあったが、徐々に食欲がなくなるとともに体力が衰え、1週間前から点滴をはじめ、意識も朦朧とし、何時息を引き取るかもわからない毎日であった。

点滴の母窓越しの小春風

酔宵子

葬儀は勧明寺の前住職の息子である現住職により懇ろに供養していただいた。また、四十九日法要、納骨も滞りなく終わり、慌ただしい令和4年の年の瀬を迎えたのである。

いつもいる母の声なき除夜の夜

酔宵子

幕張賛歌

高橋育郎

吹く風いつも さわやかで

春は花見の 花見川

夏涼しくて 冬暖かい

おお幕張 住みよい町だ

甘い香りが 漂うよ

甘薯先生 さつまいも

青木昆陽 その名は高し

おお幕張 昆陽神社

旧街道の 町並みは

古い歴史の たたずまい

子守神社 奇の堂の山

おお幕張 からたちの花

船溜まり跡 公園に

かつての海を 偲ぼうよ

木々の緑は 安らぎの場

おお幕張 文化を担う

瞳を開き 見上げれば

高層ビル群 そびえたつ

幕張メッセ 新都心

おお幕張 世界にひらく

絹の話（147）

「アトリエテレビ」今泉雅勝

絹の話をする

私は野生種の繭から採れる絹を使ってストールや洋服、枕、毛布など製作販売している関係上、お客様に絹の話をする事が日常です。どんな状況でどんな対応をしているか内幕をお話してみましよう。

立ち話

デパート等では私共の展示の前を多くの人が横目で見ながら行き交います。

視覚で集客：お客は製品の素材、デザイン、色艶に反応して立ち止まります。

お客は「絹ですか？」と素材を訊ねます。「野生の絹」ですと答えると、「野生の絹とはなんですか？」と野蚕絹特有なシャンパンゴールドに光る品に目線が落ちていきます。

この最初に目線が落ちた物を販売員はしっかり記憶しておく事が色々品選びをして迷っているお客様の決め手

に繋がる事が多いので大事な事です。

触覚で販促：女性の殆どは品物に触って皮膚で確かめなければ購入しません。（男性には少ない行動）

手に取って頂ける所まで誘導できれば50%販売達成です。お客様は手に取った感触を確かめながら洗濯（質問の80%）、プレス、保管の方法さらには健康にどのような良いかなど矢継ぎ早に質問が飛んで来ます。

それらの話には10～30秒以内でうっとうしく感じられないように的確に短くお答えする様にしています。次々と質問される方もいらつしやいますが、立ち話では一話題30秒以内で次の話に移るようにしています。時としてお客様と意見が分かれ、話がつれる事もありますが、自分の経験と絹の物性による科学的根拠などをお話すると「目からウロコ」などと言って「今日はここを通してよかった」などと感動してご常連になって下さる方もいらつしやいます。このような時は10分、時には30分も話し込む時があります。中には展示している繭などを見て、懐かしいと言って昔の話をなさる方もいらつしやいますが、そんな時は聞くに限りません。往時の養蚕の様子、時として絹の歴史には記録されていないが重要な事実（繭を食べて口から糸を出す等）を経験として話して下さる事があるからです。

質問にお答えすると言っても紋切り型では人の心は掴めません。お客様のこの度の利用目的、職業、容姿年齢、絹の取り扱い等の知識経験の有無などを即座に判断して、その方に相応した返事をしなければなりません。楽しい買い物：昨今のデパートは楽しくないと言われなように、あくまでも質問のやりとりでおお客様の知識欲が少しでも満たされ、気持が楽しく高揚して頂かなければなりません。

これがサービスなのだと思います。

講演

講演は演題と時間が限られています。

また聴衆が20〜30人の時と100人以上の時とは話の進め方が違って来ます。

少人数の時は聞いている人の顔が全員見渡せますので、話の内容が理解されているのか、不興なのか聴衆の方々の目を見れば分ります。したがって聴衆の顔つきを見ながら話を進める事になり、笑顔が多い方に話が引き込まれ、演題からずれてしまう事ありますので気を付けなければなりません。

しかし学術的な話以外の少人数の場合は「絹の話」を楽しむながら絹を少しでも理解していただければ良いと

思いますので、演題から少々離れて終わる事もあります。

ところが日本人の絹に関する共通認識が欠如して来ている昨今、年齢職業などがバラバラの場合、当然絹の知識、経験も様々で、生糸、紬などの用語が共用できない事が多いので、それらの材料、製品などの見本または映像を用意して行かなければなりません。実はその様な所で時間を使いたくない事が多々あります。また話を理解しやすく面白くするため誰もが知っているような例え話を出すのですが、「黒田節」とは何ですか？という質問を受けたらして黒田節を説明していると他の人の興味が覚めてしまいます。

絹の歴史の話をする時も大変苦労します。

中国や世界、日本の歴史年代とそれぞれの王朝の位置が分かっていると面白さも半減してしまいます。

映像を多く取り入れて理解を深めて頂くより方法が見つかりませんが、本当は話者の表情と熱意が聴衆に伝わった方が良いと思っています。講談の語り口はお手本になります。その方が聴き手の記憶にも残ります。

聴衆の多い時は講演要旨に沿って時間通りに進めて行けばよいので意外に楽です。

「江上浩二の独り言」 62

江 上 浩 二

闇と光汚染

昨年末、お付き合ひのある企業様から所謂翌年の新年のご挨拶の品を頂いた。翌日、その頂いた手作り写真カレンダーを開くと、名刺大のカードが挟んであり、2023年／先を見る との表書き、裏には一寸先は闇か光明か と添えてあり、その裏の添え書の方がレコードのA面のように聴こえたのである。

これまで、私が漢字文化で一応育った60余年の間、字の構成としてはある時、気が付いていたのは間違いないことであるが、きちんと意識して、門構えのなかに音という文字が挟まれていて、それをヤミとして自分自身に受け入れていたのか少々怪しくなった。なぜなのか、漢字の古典として、部首等の組合せで新たな文字を生み出していく、今流のイノベーションが普通に行われるのが象形文字である漢字文化の骨格である。なぜ、門構えに音で、音とは一見関係なさそうなヤミを意味させるのであるろうか？

全くの個人的経験であるが、信貴山の朝護孫子寺に行くとお堂の地下に造られた空間をわざわざお金を払って

までして、そのヤミを体験（戒壇巡り）したことがあった。そこは本当に全く光明のない真つ暗な空間で、壁つたいに人は歩く事しか出来ない。指先の触覚（感覚）が頼りである。しかし、暗くても、人が2人居て、声だけが2人を結びつけられる事も出来るのである。闇というのはこういう感覚的に分類出来ることばで、物理的意味も持っている。

さて、もう一つの光明であるが、次の2010年6月のマイブログで2009年に話題として取り上げた光汚染について書き残してあった。

追記 *1、*2

昨年2009年の前半に、海外の雑誌に掲載されていた環境問題。これまで、環境問題の中で汚染物質排出はフロンガス、二酸化炭素ガスや有害金属、有害有機物質、炭素微粒子、石綿などが取り上げられ、指摘されていたが、ある海外雑誌では、light pollution を取り上げている。

過剰過ぎる夜の照明。これは安全な night life や夜間屋外活動（スポーツ、イベント、何もプロだけでなく一般の人が夜間帯に行うものが非常に多い）を拡大してきた。夜間が明るくなると、人の生理的営みが神経的

にも阻害されてくるそうだ。人だけでなく、人工の光が与える動物への影響もあるという。

*1 半導体の1種であるLED照明が開発されて、エネルギー効率が従来の白熱灯に比べて約3分の1と非常に小さくなったことは良いのだが、装置のコストも低減されて、従来と同じエネルギーをと投入すると光る光束の量は3倍になり、夜空が更に明るく輝いてしまう光汚染（公害）となってしまうているのだ。

400年前のガリレオが初めて手製の望遠鏡で見た星は今や都会では決して見れないというノスタルジック的文章の観点だけでなく、夜間照明の在り方も検討課題の一つとして入りたい。光で汚染と言われると、いい気分がしない。せいぜい、キャンプの焚火の明るさで済ませる生活がいのだろうか。現代人類の生活がここまで来てしまつてると後戻りは出来ない。

米国NASA提供が提供している夜間衛星写真（添付URL）は、おそらく想像以上に地球規模で夜の世界の営みが奥地まで進んでいる事を物語っている。

<http://apod.nasa.gov/apod/ap001127.html>

このサイトの中央にある写真をクリックすると詳細な夜間の光の分布を見ることが出来る。この写真を見て、

何を想像してしまうか。想像力の豊かな人ほど悲観的になつてしまうかもしれない。今や、全世界にくまなく広まっている、電気供給網（グリッド）が出来上がっていることは、エジソンの時代の電球の発明から100数十年という長い時間が見える。この光の分布を見ると、地球上のちっぽけな狭い日本だけでエコ、グリーン運動を血眼に行つても、本音のところ効果がなさそうに思える。グローバルな取り組みが是非必要であろう。

地球上にいて、今でもかなりの奥地へ行くと、その夜は闇夜でなく、天を見上げると満天の星と天の川で一杯である。その様子を高感度映像でどこかのTV番組が流していた。それは、人工の照明がないからこそある、ありのままの世界であつて、古の人は、現代の宇宙へ上がつてしまった衛星からではなく、地上から宇宙の地図の光のグリッドを見て、想像を広げ、神話などを語っていたのであろう。その高感度TV放映像の中を、素早く右から左方向動き、消え去つた強い光があつた。やはり、人の仕事の「未確認飛行物体」が夜間でも蠢いている証であつた。*2 私自身の体験でも1980年代の後半の米国東岸部のノースカロライナ州の田舎の夜空は、まだこのような「闇夜」であつた。

初狩便り
(15)



花
野
み
ぷ
り





餅つき

昨年、私たちはもち米を初めて作った。何枚かある田んぼのなかの一番小さい三畝（約3アール）の田んぼで「コガネモチ」という品種のもち米を作ってみた。コシヒカリより背が高く、根張りをしっかりさせないと倒伏しやすい。背が高い分、稲藁は長くて使いやすい上等品だ。注連縄などの藁細工をする人にとっては、垂涎の藁らしい。収穫量はもみ米で160キロとなった。

このもち米を使って、年末に餅つきをした。臼と杵は近所から借りてきた。前日に四臼分のもち米八升（約12キロ）を研ぎ、たっぷり水を吸わせる。翌朝、よく水切りをして、羽釜に蒸し器を乗せて、蒸してゆく。あーなんていい匂いだろう。蒸し上がったら、冷めないように秒速で臼に入れて捏ねる。そこから力持ちの出番となり、熱々のうちにつき上げる。

つき上がった餅は、くるみ、あんこ、大根たっぷりおろし餅、砂糖醤油、のりの香もうれしい磯辺で食べる。

つくしたての餅は絶品。好天に恵まれ、「おいしいね」「たのしいね」とみんなの笑顔がはじけた。

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田のひとり言
<https://hondachiro.exblog.jp/>

2022年12月26日

3S+ゆたぼん+ヨーグルト+八分

空気の乾燥が凄いです

乾燥が強いと身体を守るために

皮膚からも水分を持っていけます

です

小便の回数が8回を下回るようでしたら

普段の1.5倍ぐらいの水分補給をしましょう

本田カイロプラクティックの

基本中の基本 3S+ゆたぼん+ヨーグルト

自宅で個人で出来る健康法

今日で最後の4回目になります

今回は最近追加した 八分 です

八分 とは

やり過ぎない 座り過ぎない

立ち過ぎない 歩き過ぎない

運動し過ぎない 我慢し過ぎない

見過ぎない 食べ過ぎない

頑張り過ぎない

などなど

何でもやり過ぎないという感じで

ほどほど という事です

偏らず バランス 良くやる

いい加減ではなく 良い加減でやっていきましょ

う 今日笑いながら行きます

2022年12月28日

2022年 最後のひとり言

患者さん 「先生 今年も1年本当にありがとうございました」

私 「ごちそうさま本当にありがとうございました」

患者さん 「先生が何でお礼をいうんですか？」

というやり取りを何回もしています

恐縮して下さる患者さんの謙虚さに感謝しますが

私としては

この1年間 本田カイロプラクティックに

雨や風が吹きすさぶ中を

花粉や黄砂のしんどい時も

夏の照りつける日差しの中を

開運坂を汗だくになって越え

信頼関係ありきの

皆さんの笑顔にほっと安心させていただきました

ですので

来ていただき施術させて頂けることに感謝なんです

これからも

微力ではありますが皆さんと一緒に

日々の生活に支障がなるべくなく

幸せな日常を過ごしていたただける

お力添えが出来たらと思います

今年も1年本当にありがとうございました

来年も楽しみにお待ちしております

康鍼治療院 (www.yasuhari.com)

玄 翁

「癸卯の歳」

今年は癸陰の歳
十干最後のめぐりなり
陰の最後は陰の極まり
活動終焉 一旦停止
終わるは 動きの停止なり
停止するのは今までの
陽の活動 世の動き
個人も 社会も一つの区切り
時代の終わりの時となる
外側終わりとなるけれど
内側新たな始まりが
陰の時間にや始まるぞ
陰が極まり 胎養し
内燃 新たな生命の
力が徐々に動き出す

「卯」の歳十二支四番目

木性・陽遁始まる時
発芽している植物が
双葉を出して成長し
満開の花を目指してく
木性 動きの象徴で
地道に行動・表現すれば
動きの中で 繁茂して
人の能力成長し
未来の花を育ててく

癸卯の歳 干支の意味
終わりに始まる時となる
今まで古きは終わりを告げて
新たな時代がはじまるぞ
生命内側感覚と
向き合いそれを表現し
動き始めりや 成長し
未来に向かって花が咲く
陰の極まり 古きの終わり
新たな未来をつくる時
節分過ぎたら切り替えよ



「塩味・鹹味的作用」

東洋医学にや味がある

味覚を感じりや 氣が動き

身体様々作用する

塩味・鹹味は味の素

全ての食事を美味しくす

塩味は水を動かして

外に抜き出し 引き締めて

風味や味氣を凝縮し

味を引き出す 作用あり

塩分濃ければ 硬くなり

塩分薄けりや 緩くなる

良き塩梅が 美味しくす

塩味鹹味となりなりて

鹹味は体に作用する

塩分 腎へと働いて

水分・血圧調整し

生命力の土台をなす

鹹味は精へと働いて

脳・髓・骨を刺激する

塩は固める働きで

骨を丈夫にするものぞ

脳髓神経 塩分で

伝達・伝導 機能する

塩分足りなきや精が虚し

神経全体鈍くなる

鹹味は血に作用して

熱を保持して温める

血 温まりや 活動が

活発 元氣になっていく

血が冷えれば動きが止まり

身体活動鈍くなる

鹹味は 美味しさだけでなく

適度な塩梅 身体の

活動・休息調整し

命を支える味覚なり



はごろもじやすみん
羽衣邪悉茗

桜台楼主人

あめ お まんせいさか
雨を帯び蔓生盛んに

もんぜんしき かおり はな
門前頻りに香を放つ

びやく かしょうへき おお
白花障壁を蒙い

とみ はげ ばんしゅん よそお
頓に励む晩春の粧い

羽衣邪悉茗

帯雨蔓生盛 門前頻放香

白花蒙障壁 頓勵晩春粧

(語釈) ○羽衣邪悉茗…羽衣ジャスマイン。白い花は小さいが蔓一杯に咲く。香り強く、蔓を伸ばして生命力在り。

○蔓生…つる草。 ○障壁…塀。 ○頼に…とみに。急に。

(通釈) 晩春の雨を帯びてつる草がどんどん伸び、家の回りは強い香りが漂う。羽衣ジャスマインだ。この蔓を伸ばして咲く白い花が垣根を掩っている。季節が移ろう中で晩春の粧いを彼女なりにせつせとしているのだ。

※春先になるとこの白い花が蔓がやたらと伸ばし、小さな白い花が一杯に咲く。家の玄関を彩って良いのだが、蔓の伸びかたが急で、車庫の横なので運転席に入るのに邪魔になる。その為に切りそろえるのだが、切っても切っても直ぐに蔓を伸ばしてくる。絡んでくるようでもある。

匂いと云い、生命力に溢れている。花粉を背広に付けないのには安心しているが、どうも花粉と化粧香水とない交ぜになっていけない。別にうしろめたい思いをするのではないのだが。

編集室だより【二〇二二年十二月】

今 泉 由 利

○三河アララギ誌、二月号への原稿が届きはじめ、この日々の皆様の様子がわかり、近くに居られる気持ちになります。なんと潤い。今、この時を、大切に守ってゆきたく思います。毎月々の第二日曜日を、三河アララギの皆様の編集会として、『恵比寿の三河アララギ編集室』をお訪ねください。お出掛けいただけます時は、事前に、電話なり、ご連絡をいただきたいと思います。積もるお話、沢山あります。（コロナ禍終了後に）

○マイナンバーカードを受取りにゆく。必要なのか。不用なのか。理解出来てはいないけれど、現役のひとり、としてしつかり生きていよう。

○アトリエ・テレビ。『絹の話』は、いよいよ147回となりました。今泉雅勝氏、ありがとうございます。学生時代から、未知を求めて、世界を闊歩し、豊富な話題は魅力的。繊維、染色、織物などなどの大家です。

○三河アララギ新年号の『割り付け』を、新橋の印刷所に届けにゆく。以前住んでいた王子より新橋へ行くのと、恵比寿から新橋へゆくの、新しい景色を楽しんだ。

○インドネシア方面の仕事をしていた、ニューヨークの由野が、お正月を一緒に過すために、恵比寿の新しい住所に帰ってきた。『ニューヨーク日記』を（195）回、続けていてくれます。日本人の女の子が世界で、自分の力で生きてゆく、というを目的に育てた子が、自分で生きています。

○世界のいろいろな所で働き続けている玉由が、日本の仕事のために、恵比寿の家へ帰ってきました。これで、我家の皆揃ってのお正月です。私流の門松、お餅屋さんで、一番大きなお供え。こんなに、大きく、硬くなったお餅はどうすれば良いのだろう！と心配を残してお正月の支度。

外国にすることが多い子達が、日本に対するあこがれ！を皆、かなえてあげたい。お正月が過ぎ、困難に直面した時、その時の一番良い方法にすれば良い。まず、わ！と喜んでくれれば良い。

○世界一を決める、サッカーの第22回ワールドカップ、カタール大会を、テレビ観戦。ドーハのルサイル競技場で、アルゼンチンが36年ぶり、3度目の優勝を果たした。アルゼンチンの「メツシ」は金色に輝くトロフィを受けている。この光景を見ていて、36年前、W杯メキシコ大会でアルゼンチンに優勝をもたらせた「マラドーナ」。この時、私はアルゼンチンに住んでいて、アルゼンチンの自宅でこの光景を見ていたことを思い出した。それはそれは輝き渡ったブエノスアイレス。

ブエノスアイレスの町の中央に立つ、「オペリスコ」に向かって、歩く歩く、泣きながら、アルゼンチンの国旗にくるまっている人。老も若きも赤ちゃんも、皆、家から出てきて、オペリスコに向ってゆく。どこもかしこも、人々で埋まった。本当に驚いた。アルゼンチンの人々の喜びの表現。アルゼンチンでの生活も、思い出した。どんどん思い出してくる。懐かしい。私を育てて下さった国。



「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所 〒一五〇・〇〇一三

東京都渋谷区恵比寿三・四五・三

フオーレストヒルズ三〇二

ケイタイ 090・8434・8646

TEL 03・6765・5838

◇URL <http://imaizumiyuri.jp/>

E-mail imayurizm@gmail.com

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇どなたも参加、投稿いただけます。

三河アララギ編集室 今泉由利 までご相談ください。

◇原稿は毎月末日までに、発行所まで郵送、メール、お届け下さい。

◇会費制は廃止。

◇昭和七年、三河地域のアララギ歌人が集い、創立歌会が開かれ、御津磯夫主宰「三河アララギ」誕生。

◇令和四年現在まで一号の欠刊なく、続いてきました、続いてゆきます。

◇編集・発行 今泉由利